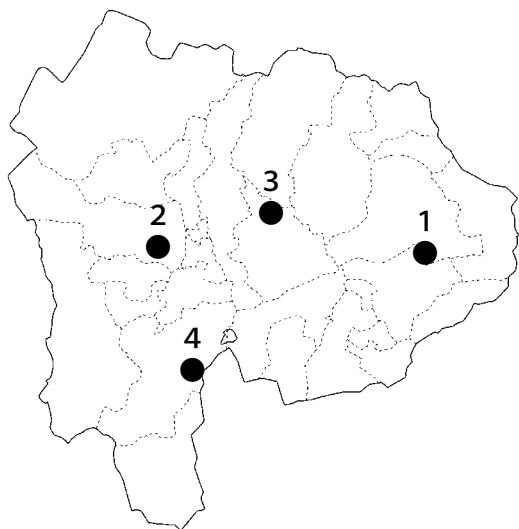


2026(令和8)年度 第1回 遺跡調査発表会要旨



発表遺跡 Line up

- 発表1 なかやいせき 中谷遺跡 (都留市)
山梨県埋蔵文化財センター 鷹野 あきこ
- 発表2 みわみなみいせき 三輪南遺跡 (南アルプス市)
南アルプス市教育委員会 小澤 英幸
- 発表3 りゅうのきいせき 竜ノ木遺跡 (笛吹市)
NPO 法人茅ヶ岳歴史文化研究所 佐野 隆
- 発表4 かやでやきんざんいせき 茅小屋金山遺跡 (身延町)
帝京大学文化財研究所 櫛原 功一



1 中谷遺跡
縄文時代(約四千年前)の集落跡
柄鏡形竪穴住居跡を発見



2 三輪南遺跡
縄文時代の遺物廃棄場所、
古墳時代の焼失建物を確認



3 竜ノ木遺跡
山梨郡林戸郷 国分尼寺の造営
管理に携わった人々の集落



4 茅小屋金山遺跡
湯之奥金山の更なる歴史解明へ！
鉦山臼で挽かれた金粒も確認

開催日 2026(令和8)年 10月10日(土)
会場 帝京大学文化財研究所 大ホール

主催 山梨県考古学協会
山梨県埋蔵文化財センター

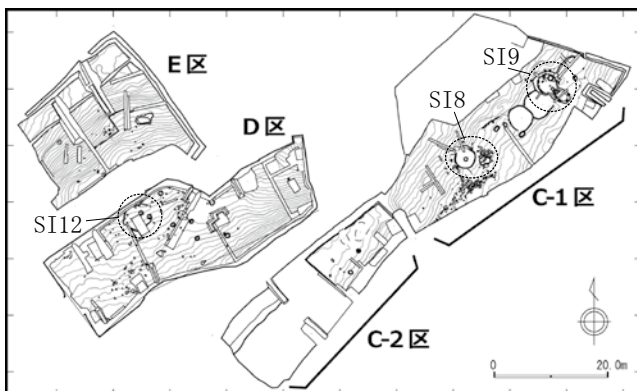
なかや いせき 中谷遺跡

山梨県埋蔵文化財センター 鷹野 あきこ

- 1 所在地 都留市小形山 2265-1
- 2 調査主体 山梨県埋蔵文化財センター
- 3 調査期間 令和7年5月12日～
令和8年3月27日
- 4 調査面積 約 6,000㎡ (3,000㎡×2面)
- 5 調査原因 中央新幹線(品川・名古屋間)建設工事
- 6 調査担当者 鷹野あきこ・河西 完・佐々木卓二
- 7 調査の概要

(1) 遺跡の環境

都留市小形山にある中谷遺跡は、高川山の東麓に位置しており、遺跡の南を流れる高川が作り出した開析谷から、南東へつながる大原台地へまたがって展開しています。本遺跡は、過去複数回にわたって調査されてきました。また、令和6年度には令和7年度の調査区の南西側を調査しており、奈良～平安時代の集落跡を確認しています。



今回の調査区は、全体で約 11 m もの高低差があり、複数の文化面から、縄文時代前期～近代という、様々な時期の人々の活動の痕跡が見つかりました。それら全部を報告したいところではありますが、今回は、特徴的な遺構が確認された縄文時代後期を中心に、調査成果をご紹介します。

(2) 調査の成果

縄文時代後期 縄文時代後期の遺構は、C - 1 区からまとまって発見されました。堀之内式期(縄文時代後期前葉)の柄鏡形竪穴住居跡 2 軒のほか、配石遺構、竪穴状遺構等が見つかりました。この住居跡は近代以降の造成によって一部が削平されていたものの、背後の高川山が大きく立ち上がる斜面裾部に作られた、住居入口(柄部)を斜面下方に持つ住居であったと考えられます。

柄鏡形竪穴住居跡(SI9)は、住居廃絶後に周囲から崩れたとみられる河原石と、富士山由来の火山灰質土で覆われた状態で見つかりました。この住居は掘り込みや柄部配石の残存状況が良好で、柄部先端から炉までの空間には、折損した石棒が配置されていました。主体部への入り口となる柄部先端で大小の石が整然と並び、石棒、炉へと繋がる姿は圧巻の一言です。

もう一方の柄鏡形竪穴住居跡(SI8)は、柄部が平安時代の流路によって壊されていたため、主体部のみの調査となりました。この住居は火災住居であり、廃絶に伴って礫が爆ぜる程の強い熱を受けたと考えられます。住居構造としては、壁面沿いに板状の大礫が巡らされるのが特徴です。この大礫と壁面の間には、土器片や石器を含む大量の小礫が、土と混合された状態で堆積していました。

縄文時代前期～中期 縄文時代前期の遺構として、E 区から集石土坑 1 基、D 区から土坑が見つかりました。遺構に伴う遺物は出土しませんでした。遺物包含層から出土した遺物から、諸磯式期(前期後半)以前のものと考えられます。これらの遺構や遺物から、この段階には既に、高川山斜面において人々が活動していたことが明らかとなりました。

縄文時代中期の遺構としては、D 区から曾利 I 式期(縄文時代中期後半)の竪穴住居跡 1 軒、E 区から中期初頭から中葉とみられる焼土遺構 1 基を検出しました。今回 D 区で見つかった住居跡(SI12)は、中谷遺跡全体を通して見て、居住の痕跡を示す遺構として最も標高の高い場所に位置するものです。住居入口部には、意図的に下半部を打ち欠いた深鉢形土器が横向きに埋められており(埋甕)、住居中央では石囲炉を確認しました。住居埋土中には高川山の基盤岩層の転落岩が含まれており、埋没時に斜面上方における崩壊の影響を受けたと考えられます。

(3) まとめと課題

都留市では、市内を流れる河川が作り出した河岸段丘上に縄文時代の遺跡が多く立地し、山と川に挟まれた土地に人々が暮らしていたことが明らかとなっています。過去の調査を含め、中谷遺跡では人々の活動の痕跡だけでなく、旧河道や斜面の崩壊といった地形の変化も確認されています。今後、累積した地層情報の対比を行うことで、微地形の変化や居住空間の移動など、長期間にわたる詳細な景観の移り変わりが明らかになることが期待されます。



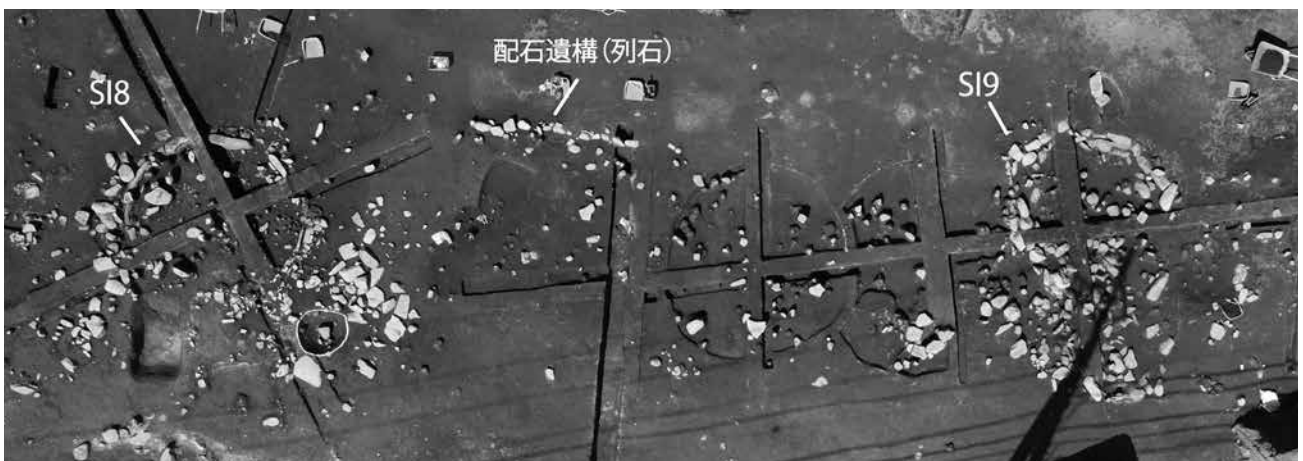
調査区遠景（南西から）



柄鏡形竪穴住居跡 床面検出状況（C - 1区 SI9）



柄鏡形竪穴住居跡 柄部（C - 1区 SI9）



縄文時代後期面 検出時（C - 1区）



縄文時代中期 埋甕（D区 SI12）



縄文時代前期 集石土坑（E区）

三輪南遺跡

南アルプス市教育委員会 小澤 英幸

- 1 所在地 南アルプス市下宮地内
- 2 調査主体 南アルプス市教育委員会
- 3 調査期間 令和8年2月3日～
令和8年3月19日
- 4 調査面積 約474㎡
- 5 調査原因 宅地造成
- 6 調査担当者 小澤英幸
- 7 調査の概要

(1) 遺跡の立地と環境

三輪南遺跡は南アルプス市南部の甲西地区に所在し、調査地点は滝沢川や漆川によって形成された複合扇状地上の微高地に立地し、標高は約278mを計ります。調査地点の北には、式内社に比定され、舟を曳く曳舟神事で知られる神部神社があります。(写真1)。

遺跡の周辺は古くから豊富な湧水に恵まれた地域でした。調査地点の東に位置する江原の浅間神社境内の御手洗池から湧き出る水は周囲の田を潤す大切な水源となっていました。こうした水の恵みを背景にこの地域では弥生時代以降、人々の生活が営まれてきました。

(2) 調査の経過

本調査は調査地点で宅地造成が計画され、令和7年10月末に南アルプス市教育委員会が試掘調査を行った結果、古墳時代の遺構や遺物が確認されたため、新設道路範囲を対象に令和8年2月3日から3月19日にかけて発掘調査を実施しました。

(3) 調査成果

調査の結果、竪穴建物跡2軒(SI01・02)、複数の土坑、不明遺構1基(SX01)が確認されました。

・縄文時代

縄文時代で注目される遺物はイノシシを表現したと考えられる動物装飾付土器が出土しました(写真2)。また地形の落ち込み箇所に、土器や石器の廃棄場所と考えられる遺構が確認されました。周囲に住居跡などの遺構は確認されませんでしたが、廃棄場所からは大量の土器(写真3)や破損した石器が出土しました。出土した土器は中期初頭の五領ケ台式に限られており、周囲に同時期の集落の存在が想定されます。

・弥生時代

弥生時代の遺構は底が広がるフラスコ状を呈する土

坑が1基確認されました。土坑からは弥生時代前期後葉～中期初頭と考えられる条痕文土器が多量に出土しました。

・古墳時代

古墳時代の遺構は建物跡が2軒、土坑が複数確認されました。建物跡SI01は一部が調査区外となり、一辺約5.5mの方形を呈すると想定されます。北側の壁にはカマドの一部が確認され、大形の礫を用いて構築されていました。建物内からは多くの炭化材や焼土が確認されたため、火災によって焼失した建物と考えられます。遺物は床面上から完形の土師器の坏のほか、甕や甔が出土しました(写真4)。建物跡SI02は上部が削平されており、調査範囲内では床面の一部を検出しました。建物跡は一辺約4.6mの方形を呈すると想定されます。カマドは調査範囲内では検出されませんでした。時期は出土した土器から古墳時代後期と考えられます。試掘調査時には須恵器の長頸壺が出土しています。

・古墳時代以降(写真5)

正確な時代については検証中ですが、古墳時代後期の建物跡であるSI01を壊して窯跡と推測されるSX01が構築されていました。SX01は地面を掘りくぼめた上に白色土が塗られており、その一部が赤色化していたことから内部で焼成が行われたと考えられます。土層断面から複数回にわたって焼成と白色土の塗り直しが行われたことがわかりました。

(4) まとめと課題

調査の結果、縄文・弥生・古墳時代の遺構・遺物が確認され、調査地点周辺は古くから人々が活動していたことが分かりました。特に注目されるのは、これまで市内で縄文遺跡の存在が想定されていなかった地域から縄文土器や石器の廃棄場所が確認されたことです。遺跡の立地と旧地形との検証が今後の課題です。時代など詳細は検討中ですが、窯跡と考えられる遺構が確認されたことは土地利用を考えるうえで貴重な成果となりました。調査成果を周辺の調査事例と合わせて考えることで、この地域の歴史がさらに明らかになることが期待されます。



写真1 調査地点遠景（南から）



写真2 動物装飾付土器（縄文時代）出土状況



写真3 縄文土器（五領ヶ台式）出土状況



写真4 SI01（古墳時代後期）遺物出土状況



写真5 SX01 完掘状況（東から）

竜ノ木遺跡

NPO 法人茅ヶ岳歴史文化研究所 佐野 隆

- 1 所在地 笛吹市一宮町末木字龍之木620番1
- 2 調査主体 NPO 法人茅ヶ岳歴史文化研究所
- 3 調査期間 令和8年3月9日～
令和8年5月15日
- 4 調査面積 1,444㎡
- 5 調査原因 店舗建設
- 6 調査担当者 佐野 隆
- 7 調査の概要

(1) 調査地点の環境

竜ノ木遺跡は金川扇状地の標高345m付近、国史跡甲斐国分尼寺跡の北東に位置します。調査地点は果樹畑に開墾・造成された後、駐車場に転用されていました。その結果、遺跡の一部が削平されていましたが、竪穴住居20軒、掘立柱建物3棟、土坑1基、溝跡6条が発見されました。

調査地点の周辺はこれまでも繰り返し発掘調査され、甲斐国分尼寺の寺域、寺院管理に関係した人々の集落が確認され、国分尼寺の東側一帯は「林戸郷」（はやしごう）に比定されています。今回の発掘調査地点は林戸郷に属し、寺院管理に関係した集落の一角に相当すると思われます。

(2) 住居跡

住居から出土した土師器の特徴から住居が営まれた時期を推定することができます。20軒の住居は8世紀第4四半期から11世紀初頭までのおよそ250年間に居住されていたようです。そのなかから特徴がある住居を紹介します。

SI-5号住居は、調査された住居のなかで最も古い時期に位置づけられます。出土した坯は精製された粘土でていねいに整形されています。器外面は横方向にへう磨きされ、内面とみこみにきれいな放射状暗文が施されています。底面は糸切り後に平滑に磨かれています。出土した土師器の調整技法からこの住居は8世紀第4四半期に営まれていたと推測されます。聖武天皇の国分寺建立の詔が発せられたのが天平十三（741）年、国分尼寺の本尊に阿弥陀三尊を造像するよう命じられたのが天平宝字五（761）年のことですから、竜ノ木遺跡は国分尼寺の伽藍整備と同時期に営まれていたことが分かります。

SI-6号住居、SI-9号住居、SI-10号住居、SI-12号住居は9世紀第4四半期から10世紀第3四半期に営まれた住居です。この4軒の住居ではカマドをつくる

際に丸瓦、平瓦を使用していました。一般的なカマドは石を骨組みにして粘土を貼ってつくりまします。瓦をカマドの材料に転用するのは国分尼寺の維持管理にかかわった人たちの住居ならではのようです。カマドに瓦を用いるのは9世紀第4四半期以降ですから国分尼寺が造営されてから100年以上が経過しています。寺院建立から100年ほどで瓦の葺き替えを伴うような大規模修繕が施されたのかもしれませんが。

SI-5号住居とSI-8号住居、SI-9号住居、SI-11号住居、SI-12号住居、SI-13号住居、SI-14号住居は、ほぼ同じ地点で重複しながら建築されています。時期が特定できないSI-14号住居を除くと、もっとも古いのがSI-5号住居で8世紀第4四半期、SI-13号住居は9世紀第1四半期、SI-11号が9世紀末から10世紀前半、SI-12号住居が10世紀第3四半期、SI-8号住居が10世紀末から11世紀初頭という順番になりそうです。各住居の間には若干の断絶がありますが、同一地点で建築されたこれらの住居には、何かしらの関係性がうかがえます。

(3) 墨書土器

土師器の器面に墨で文字を書いた「墨書土器」が出土しています。SI-2号住居（10世紀前半～10世紀第3四半期）には「若佛」、「佛」があります。「若佛」は仏教經典にみえる仏教的な語とのことです。

SI-12号住居（10世紀前半～10世紀第3四半期）では「金寺」の墨書土器が出土しました。国分寺は正式には「金光明四天王護国之寺」と呼ばれました。「金寺」はそれを略して記したものと思われます。国分尼寺の正式名称は「法華滅罪之寺」です。これまでに国分尼寺周辺の発掘調査で「法寺」「花寺」の墨書が出土しているそうです。

SI-18号住居（9世紀末～10世紀前半）では「廣」の墨書土器2点が発掘されています。人名を表すのでしょうか？

これらのほかにも「正カ」、「祢カ」、「井」、「中カ」、「寺」、「木カ」、「卅」などの墨書がみつかっています。

(4) 溝跡

南北に延びる複数の溝跡が平行してみつかっています。溝は幅40cm程度、深さ30cm程度と小規模で多量の水流があった痕跡はありません。溝の役割は不明ですが、金川扇状地一帯は水の便が悪いことでも知られていますので生活用水の導水路かもしれません。



竜ノ木遺跡遠景（西側上空より）



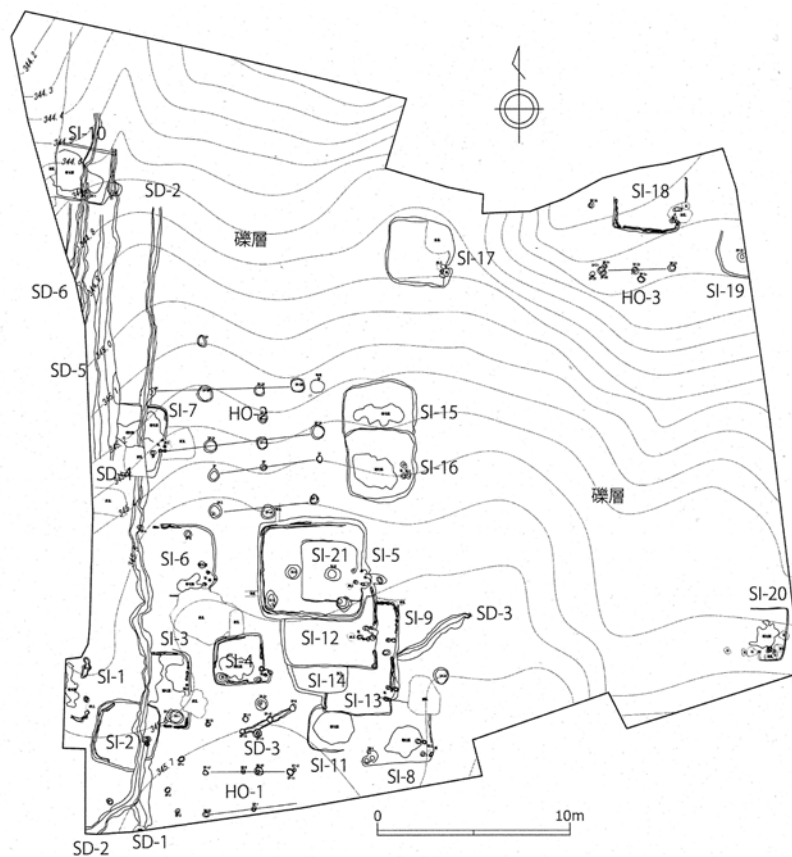
国分尼寺瓦を用いたカマド（SI-9号住居）



「若佛」墨書土器（SI-2号住居）



「金寺」墨書土器（SI-12号住居）



竜ノ木遺跡全体図

茅小屋金山遺跡（1次）

帝京大学文化財研究所 榎原 功一

- 1 所在地 南巨摩郡身延町湯之奥
- 2 調査主体 身延町教育委員会
- 3 調査期間 令和8年3月9日～
令和8年3月16日
- 4 調査面積 91㎡
- 5 調査原因 学術調査
- 6 調査担当者 深沢広太・榎原功一
- 7 調査の概要

茅小屋金山遺跡は、身延町毛無山（標高 1945 m）の西南麓、下部川支流のイリノ沢右岸の標高 800 m 付近に所在する金山遺跡で、イリノ沢上流の内山金山遺跡（標高 1350 m 付近）、南側尾根の金山沢沿いにある中山金山遺跡（標高 1450 m 付近）とともに湯之奥三金山と呼ばれています。そのうち中山金山遺跡は 1989～1991 年の調査ののち、1997 年に甲斐金山遺跡のひとつとして国史跡となりました。身延町教育委員会では残る二金山遺跡の追加指定を目指し、10 年ほど前からテラス群や坑道域の確認調査を進め、詳細な遺跡分布図の作成などの調査を実施しています。そうした中で近年、イリノ沢の氾濫により一部のテラスや石造物が消失する事態が起き、遺跡の保存対策が急務となりました。そこで町教育委員会では 2025 年に湯之奥金山遺跡等検討委員会を設置し、帝京大学文化財研究所と身延町との連携協定に基づき、茅小屋、内山両金山遺跡の史跡指定に向けた試掘調査を 3 年計画で開始しました。

この調査では金山の形成過程や空間構成、管理・経営のあり方など金山遺跡の解明を目指しています。そのため数面のテラスを選んで試掘し、建物跡などの遺構、鉾山臼、陶磁器類などの遺物から時期や機能を推定するほか、文献史料や石造物の調査、鉾石やゆり滓、砂金などの鉾物学的調査を行い、同時に遺跡の保存活用に向けたデータを得ることを目的とします。

この茅小屋金山遺跡には、標高 770～845 m のイリノ沢右岸の 260 m におよぶ範囲に 21 面のテラス群（A～U テラス）が帯状に分布しています。操業時期については文献史料から 15 世紀末～17 世紀末で、とくに寛永期（1624～1644 年）に栄えたようです。遺跡からはこれまでに 100 点ほどの鉾山臼が採集さ

れていますが、興味深いことにそれらはすべて上臼供給孔が偏る「湯之奥型」で、中央に供給孔をもつ定形型上臼は 1 点も確認されていません。また青磁大皿片などの陶磁器類が見つかっていて、金山衆の生活ぶりの一端を示しています。今回の調査では、帝京大学など学生 7 名の参加により、上流側の F テラス、その下方の H テラス、中心的な P テラスを 8 日間調査しました。

F テラスは南北 26 m の三日月形のテラスで、中央付近で炭化物を多量に含む 1.6×0.8 m の長方形の炉が確認され、炉の直上に 1.2×0.6 m の範囲で敷石面が検出されました。下層にはゆり滓が固まった基盤層があり、廃土中から金粒が見つかっています。出土した陶磁器類の時期は 17 世紀～近代で、遺構は 17 世紀代と推測されます。

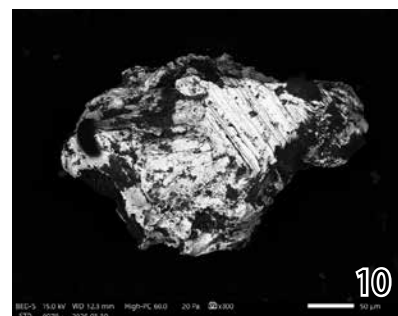
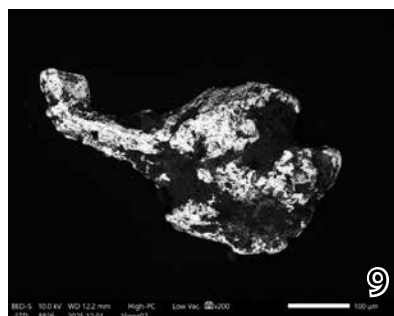
H テラスは 18×6 m の大きさと、斜面側に石積みが確認されました。

P テラスは 22×5.5 m の南北に細長いテラスで、東側および西側には石積み、石垣が整備され、石垣の一部には炭窯状石室が 2 か所存在します。茅小屋金山遺跡の中心的な精錬場ではないかとされてきましたが、調査の結果、テラス面では石囲いの囲炉裏状遺構、土間が見つかり、多数の丸釘、ドラム缶の蓋、金網が出土しました。また炭窯状遺構は石室遺構で、内部からはホーロー蓋、湯飲み茶碗、丸釘、南京錠などが出土し、炭や焼土は一切出土しなかったことから、昭和期、戦時中前後の近代遺構と推定されました。ただ、下層にはゆり滓からなる基盤層があり、周辺からは 16 世紀前半とみられる大窯段階の陶器皿や鉾山臼が出土していることから、金山操業時から昭和に至る断続的な土地利用が推測されます。

今回の調査では、遺跡内の各地点やイリノ沢で金粒や砂金の確認調査が行われ、複数地点で砂金や金粒が確認されました。それらを顕微鏡で観察したところ、テラス出土の金粒は砂金と形状が異なり、表面に線条痕やねじれがあることから、鉾山臼で挽かれた痕跡をもつことがわかり、金山遺跡調査における新たな視点を得ることができました。



- 1 茅小屋金山遺跡
全体図
(身延町作成図に
加筆)
- 2 Fテラス全景
- 3 Hテラス全景
- 4 Pテラス全景
- 5 Pテラス東端の石積
- 6 Pテラス X2 脇の
斜路の石積
- 7 Pテラス X2
- 8 Pテラス出土陶器
- 9 イリノ沢の砂金
- 10 Fテラス廃土検出の
金粒 (金井拓人撮影)



The Emergence of Sui-en "Water-Smoke Motif" Pottery in the Central Highlands of its Cultural Contexts.

水煙文土器

すいえんもんどぎ

中部高地に芽生えた

2026

9.19 SAT

— 11.23 MON

The 43rd

特別展

開館時間 9:00—17:00 [入館は16:30まで]

とその周辺

山梨県立考古博物館
Yamanashi Prefectural Museum of Archaeology



2026 (令和8) 年度 第1回 遺跡調査発表会要旨

発行日 2026年10月10日(土)

発行所 山梨県埋蔵文化財センター

TEL 055-266-3016

〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町 923

<https://www.pref.yamanashi.jp/maizou-bnk/>

山梨県考古学協会

TEL 055-263-6441

〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566

帝京大学文化財研究所内

やまなしのこうこがく <https://sankoukyou1979.wordpress.com/>

印刷所 峡南堂印刷所

TEL 055-235-2528